

## 「手習い」イギリス文化論

第7回

## ～アイルランド探訪～

北海道大学創成科学共同研究機構  
明治乳業「乳の価値創造研究」寄附 研究部門 博士研究員

小林 国之

## やり残した宿題

やはりアイルランドに行こうと思いついた。イギリスに来る前の私にとって、アイルランドは是非とも行ってみたい国の一つであった。理由は自分でもよくわからない。この国のもつ、音楽や文学の独自の文化、苦難の歴史とそれを乗り越えた人々がもつ優しさ。こうしたいわば「おとぎ話的」な聞きかじりの蓄積が、私のあこがれの遠因であろう。その点で、一般的日本人が成長していく過程でもつごく普通の感覚といってもいい。

こちらで暮らしている間に、そんな思いを次第に忘れていった。一つには、ヨーロッパ大陸のほかの国に行ったこともあり、時間的、予算的な制約があったこと。それよりも、隣国ということもあり、いざ行くとするとその気になかなかならなかったというのが、正直なところであった。

それでも、日本への帰国の日が近づいてきた初冬のある週末に、格安航空券を手に入れてエクセター空港から首都ダブリンへと飛ぶことにした。今回の旅のとりあえずの目的は、イングランドとの「違い探し」とした。アイルランドといえは、すぐいくつかのステレオタイプなキーワードを思いつく。ギネスビールにアイリッシュ音楽、ジャガイモにカソリック。しかし、

## 小林 国之(こばやし くにゆき) 氏

- 1975年 北海道に生まれる
- 2003年3月 北海道大学大学院農学研究科博士課程後期課程修了(博士(農学))  
その後、北海道大学大学院農学研究科研究員を経て
- 2004年4月 日本学術振興会特別研究員(酪農学園大学酪農学部所属)
- 2007年4月 北海道大学創成科学共同研究機構 明治乳業「乳の価値創造研究」  
寄附 研究部門 博士研究員

### ◆主な著書

『『農協と加工資本』～ジャガイモをめぐる攻防』(株)日本評論社 2005年

英語を公用語とし、パブ文化があり、イギリスのテレビ番組も簡単にみることができるといふアイルランド。イングランドとはどう違うのだろうか。わずか二泊三日の限られた時間のなかで、とにかくできるだけ、「違い探し」をしてみようと思った。

アイルランドに行くと同僚が、「本場のギネスの味を楽しんでこい。それと、ジャガイモがすごく美味しいぞ。」といった。果たしてこれは彼の真意なのか。それとも世界中に流通している「世界商品」としてのギネスビールと、パンを食べられなかった「貧しい」アイルランド人の主食であったジャガイモにたいする、イギリス人の皮肉なユーモアなのか。そのことも、むこうに行けばわかるかもしれない。

つまり、多少なりともこの約二年間の滞在で、「イギリス化」した自分を比較基準にしながら、一見イギリスと似たように見えるアイルランドを観察しようという算段だ。自分がどれだけイギリス化したのか、それをはかるリトマス紙のような効果も、その「遊び」の中に少し期待しつつ出発した。

### アイルランドという国

エクセター空港を午前九時五十五分に飛び立った飛行機は、一時間のあつという間のフライトで、ダブリンの北約十五キロ

に位置するダブリン空港へと到着した。人口約四二〇万人の 아일랜드、ダブリンはその三分の一が住むといわれる首都である。ところで、ヨーロッパは大雑把に二つに分けられる。それは、ローマ帝国の支配下になった地域とそれ以外である。その違いが文化や社会構造などに様々な仕方で影響を与えているといわれている。ローマ軍は統制された軍隊という物質的な進歩性と、キリスト教をもとにした精神的な進歩性を「武器」としてヨーロッパ各地を席捲し、「遅れた」地域を文明化していった。支配下に入った地域ではローマ式の社会経済運営システムが形成されていき、そうでない地域には独自のシステムが生き残った。

イギリスのブリテン島に上陸したローマ人達は、徐々に西へ進出していく。私の住んでいるエクセターはローマ人によつて建設された街で、南西部へ勢力を伸ばすための前線基地であった。しかし西ローマ帝国はさらに西にあるアイルランド島までは上陸しなかった。

ローマ帝国の軍隊が一度も上陸しなかったこの島に、キリスト教はローマ人の一青年パトリックによつて四三二年に持ち込まれ、広められた。このパトリックが現在のアイルランドの守護聖人である聖パトリックである。アイルランド島から蛇や有毒の動物を追い払ったという伝説をもつこの伝道師が、ドルイ

ド教を信仰していた人々にキリスト教を布教した。この島の人々の運命に大きな影響を与えることになるキリスト教、カトリックの伝来である。

ローマ人から「冬の島」と呼ばれていたアイルランドは、ローマ帝国による文明化作用の枠外にあった。アイルランドでは長く統一国家が成立せず、氏族制を中心とした複数のグループから形成されていた。そのことの一因は、内陸部に社会・経済の要所となるような地理的・地政的ポイントがなかった点にあるらしい。現在の首都ダブリンは、リフィー川という市内を東西に流れる河川が内陸部進出への拠点となるという理由から、北欧人やアングロサクソン人などの侵入者によつて開かれた街である。

ローマ帝国の支配下となった地域は、教会が地域の行政権の中心にあるという構造をもっていた。一方アイルランドでは、氏族を中心とした村落（血縁・地縁関係）を基盤として、その上にキリスト教が根付いたといわれている。そうした社会構造が、現在まで続くアイルランドの特徴としての共同体の強さの土台にあるようだ。

## ダブリン接近

さて、前置きが長くなりすぎた。

空港からダブリン市内に向かうバスに乗り込んだ。イギリスと同じく左側通行で走るダブルデッカー（二階建てバス）の二階前方に、女性ばかり十名ほどのグループがいた。大声で楽しそうにおしゃべりに興じる彼女たちの言葉を、全く聞き取れない。東欧の言葉のようにも聞こえるが、時折英語のようにも聞こえる。あとになって、彼女たちはアイルランド語（ゲール語）を話していたのかもしれないと思った。道路標識にかかれた、見慣れたアルファベットの見慣れない配列（アイルランド語表記）をみながら、異国にきたのだという思いが突如として高まった。

道路工事の都合で、町の中心部の一キロほど手前でバスからおろされた。その周りはジョージア朝風の建物が建ち並ぶ一角である。二泊分の着替えを詰め込んだいつも通勤に使っている小振りな鞆を提げたまま、しばし立ちつくした。一体中心街はどちらだろう。手元には、今日から泊まるホテル周辺の地図がある。とりあえず中心街にさえ着けばホテルまでは行ける、という目論見で準備したものであるから、中心街に着かないこと

には役に立たない代物である。人の流れをたどりつつしばらく歩くと、大きな河にでた。これが先ほど述べたようにダブリンの発展にとって決定的な役割を果たしたリフィー川であることは、あとで知ることになる。

ここまでたどり着いて、やつと市街地の見当がついた。そこで旅の定石どおりに、一路ツーリストインフォメーションを指した。ダブリンだけではなく、アイルランド全体の観光に関する情報が手にはいるからだ。道路沿いに立てられている「i」の看板を頼りになんとかたどり着き、市内の地図とホテルの場所、ついでに有名どころのパブを数件チェックした。



ダブリン市内を流れるリフィー河



ダブリン市内

## アイリッシュユパブ

ツーリストインフォメーションの教会風の建物を出たあとで、すぐ近くにあったパブにはいることにした。通りから窓越しに見える店内は薄暗く、様子をうかがうことはできないが、何はともあれ玄関のドアを開けた。ハロウィーンの飾り付けがされている薄暗い店内で、とりあえずイスに腰掛けた。注文をしようとおもいメニューを片手に、忙しそうにきびきびと動き回っている白シャツに黒パンツとベストを着たウェイターと、アイコンタクトをした。料理を運んでいた彼は私の目を見て、「ちよつと待ってろ」という意味でウイंकを返した。

入り口を入れてすぐ左側には長さ約五メートルほどのカウンターがある。カウンターの頃二十歳ぐらいといった女性が、忙しそうにサンドイッチを作っている。スーツを着たサラリーマン風の男性客が、サンドイッチの具材をあれこれ注文している。

しばらくすると、先ほどのウェイターに注文をしたギネスが運ばれてきた。トレーに載せられたパイントグラスの中の真黒い液体は、クリームのような泡を表面のうつつらと載せてたらずんでいる。壁際におかれた脚の長い丸イスに陣取った私は、

壁に沿って棚のように取り付けられた奥行き三十センチほどの細長いテーブルに載せられた、ついに巡り会った本場のギネスをながめた。そしてクリーミーな泡を上唇でよけるようにして、黒い液体を一口含んだ。芳醇な香ばしさが鼻から抜けるのを感じつつ、ゆつくりと飲み込む。うまい。思ったよりもすすきりとして飲み口である。が、イギリスでいつも飲んでいいるものとの違いは、と聞かれると、正直よくわからなかった。

◆ ◆ ◆  
 このパブでは、ウェイターが席まできて注文をとってくれて、さらに飲み物も運んでくれた。これは、自分でカウンターにいつて注文をして、飲み物は自分で運ぶ、というイギリススタイルとの違いものだ。早くもイギリスとの違いを発見したかと思ったのだが、ほかのパブでは、イギリスと同じようなスタイルだった。少し考えてみて、これはアイルランド人の人の良さと関係しているのかもしれない、と思った。彼は所在なげに入ってきたアジア人に気を利かせて、注文をとってくれたのであろう。イギリスでは、こういった「優しさ」は期待できない。それはイギリス人の「慎み深さ」の冷たい側面である。困っているように見える人がいるからといって、あれこれ世話を焼くというのは、過ぎたまねなのだ。相手は困っているように見えるが、実は全く困っておらず、声をかけることがか

えって迷惑になるかもしれない。それならば、声をかけずに気がつかない振りをする方が、相手にとつて都合がいいのではなか。そこまで考えてイギリス人はみても見ぬふりをするのである。一方アイルランド人は、困っているように見える人がいて、自分が手助けしてあげようと思えば、素直に行動に移す人々のようだ。



アイリッシュパブ

もし仮に、人間の感情が表面上に行動として表れるためには、なんらかの装置「文化」と呼べるかもしれない）が必要だとすると、イギリス人のそれは複雑、重厚な内部構造をもっており、たいいてい感情はその動力伝達過程で吸収されてしまい、動きとしてはほとんど現れない。それに対してアイルランドの人々のそれは、明快で軽やかにできており、感情が直接的な行動として表れている。そんな印象を受けた。このことは、私があとで経験した別の出来事からも話している。

◆ ◆ ◆  
ギネスを三分の一ほど飲んだ頃に、アイリッシュシチューが運ばれてきた。ジャガイモ、ニンジン、セロリ、タマネギなどを煮込んだ素朴な味のシチューを食べていると、玄関の鈴が鳴って、白人の大人が四人と一台のベビーカーが入ってきた。特徴あるアクセントが彼らがどこから来たのかを物語っている。彼らアメリカ人が入ってきた瞬間、不意に想像の舞台が、新大陸へとわたっていったアイルランド人が始めたパブへ瞬間移動した。

現在世界の経済、金融の中心であるアメリカ。その中心地であるニューヨーク、マンハッタン島は、一六二六年にオランダ西インド会社がネイティブアメリカンから二四ドル相当で買い取ったのは有名な話である。それを一六六四年に奪い取ったイ



アイリッシュシチュー

ギリスが、その指揮を執ったイギリスヨーク公にちなんでニューヨークと名付けた。

先発組として集団的、組織的にアメリカ大陸へ移り住んだアングロサクソン系（イギリス人）が勢力を伸ばしていたマンハッタン島にあとからやってきたアイルランド系移民達は、あいている土地を求めて島の南の部分に住み着いた。移住してきた彼らが、自分たちの守護聖人にちなんで立てた聖パトリック大聖堂は、現在は巨大なビル群の中に取り残されるようにたっている。

さて、かれらは移住する際に故郷の村からパブを持ち込んだ。

パブこそは、共同体的結びつきを確認し、はぐくむための重要な場であった。母国で飢餓や迫害から逃れてたどり着いた新天地は、誰もいない無人の土地ではなく、アングロサクソンの支配する土地だった。遅れてきた移民達にとつて、パブは自分たちの故郷を忍ぶと共に、外部と戦うためのエネルギーを再充填するためのベースキャンプのような役割を果たしただろう。移民達の戦いの歴史は、アメリカの歴史そのものである。移民は、その次なる移民達が来ることによつて、初めて移民ではなく自国民となる。アイルランド系移民は、新移民といわれるイタリア系、ユダヤ系、ポーランド系の移民が入ってくることによつてアメリカ人となつていった。長い年月をかけて、徐々にアイルランド人の経済的、社会的な地位は向上する。ついにアイルランド系のジョン・F・ケネディーが大統領になるまでに至る。

◆ ◆ ◆  
 コミュニティーの核としてのパブは、長らく部外者の進入を拒んできた。古くは排斥の対象であつたアイルランド文化が濃縮された場所であるパブに、現在は観光のためにアメリカ人が訪れる。それをアジア人の私ながめる。時間の流れ、歴史がもつドラマティックな作用を勝手に感じて、感動しつつ一人ギネスを飲んだ。

## アルバニーハウスホテル

◆ ◆ ◆  
 パブを出て、繁華街を抜けて歩くこと約二十分。目的のホテルへ到着した。ジョージア朝風の建物が建てられた一角にあつたホテルは、通りに沿つて続く五階建てのアパートのような建物の一部をしめている。横幅は狭く、上に長い構造だ。一階はフロントと小さな食堂があるのみで、二階からが客室となつている。建物にエレベーターはなく、五階の私の部屋までは、時折きしむ階段を上るしかない。各階の天井は高く、階段と踊り場も広々として、巨大な絵画が飾られている。手提げ荷物一つだけの私でさえも息を切らしながら五階まで昇る途中で、大きなトランクを引きずるように運ぶ女性二人組を見かけた。彼女たちは明らかに、エレベーターのないこの「歴史ある」建物に好意的ではないように見えた。

◆ ◆ ◆  
 パブで食事を済ませてきた私はホテルで一休みしてから、夜のダブリンの街へ繰り出した。ひとしきり街中をぶらついた後、近くのスーパードアでお酒を買つてホテルに戻ると、玄関のドアに鍵が掛かつていた。ドアのガラスから覗くと、フロントにはチェックインの時にいた女性とは違う、初老の男性が立っ



た。時刻は夜十一時を過ぎた頃である。私を見つけた彼は、名前と部屋番号を確認して鍵を開けてくれた。手に提げたビール入りの袋をみつけて「これから飲むのか？」ときいてきた。そうだよ、と答えて階段に向かおうとすると、「どこから来たのか？ちよつと話をしないかい？」と立て続けに話しかけてくる。あつさりとしたイギリス式のコミュニケーションになれていた私は、やや面を食らいながらも、ロビーにあつたソファアームに座った。

挨拶程度の会話の後で彼は、「オレはおまえが気に入ったよ。おまえはどうだ」と聞いてきた。すごい質問である。たつた数分の会話でここまで人のことを信頼してしまうとは。曖昧な日本人の私は、適当に返事をした。あまりの人なつつこさに驚きを隠せない私の脳裏を、単なる好意以上の可能性（危険性）がよぎった。とつさに彼の左手の薬指をみると、指輪がはめられている。結婚はしているようだ（その相手が女性とは限らないが）。「最近の若者は穴あきのジーンズをはいているんだな」といって太股の穴をさわってきた。家が農家だったというおじさんの手は、働く男の無骨でたくましい手だ。

話をそらそうと思い、おじさんの出身地を教えてください、と聞いて、少し離れたテーブルに置かれた地図をみようとして立ち上がった。地図をみながら背中を向けている私の後ろに忍び寄っ

てきた彼は、「おまえはやせているなあ」といって腰の辺りをさわってきた。

こちらでは「ゲイ」であることは隠すことではない。「私はストレート（ゲイではない人）なんだ。」といえば、「そうか」ということになる。認められている個性の一つのようなものなのだ、友人が言っていた。そうはいつても、なかなかどうしていいわからない。もちろん、彼は単なる親切な話し好きのおじさんという可能性だつてあるのだ。とりあえず失礼の無いように話を切り上げて再び階段を目指した。すると、「酒を飲んだらまた降りてくるか？」と聞いてきた。階段への道のりは遠い。「そうだね、元気があつたら」といって、ついに脱出に成功した。

部屋に戻つて、今の出来事を反芻しながら、ビールを飲んだ。三十分ほどして、そろそろ風呂にでも入ろうとしていたら、部屋の電話がなった。電話の主はもう判っている。受話器を取ると、「まだ降りてこないのか。」というおじさんの声。そう、あのおじさんは私のルームナンバーを知っているのみならず、その気になれば、合い鍵で進入することも可能なのだ。そんな風に勝手に自分のなかの恐怖心をあおっている、本気で怖くもなってきた。ここは、曖昧にしたまま不安な夜を過ごすよりも、もう一度おじさんにあつて、彼の真意を確かめる必要があると

感じた私は、風呂から上がったら降りていくことを約束して受話器を置いた。

結論から言うと、おじさんは親切心から私によくしてくれていたようだ。風呂に入ったあとロビーで三十分ほど話した彼は、自分が週末だけホテルの守衛として働くために、ダブリンの南電車で1時間ほどの村から通ってくるのだということ、自分の村のいいところを話してくれた。またダブリンに来ることがあつたら、是非このホテルに宿泊して欲しいと彼は話して、私は部屋に戻った。

ほぼ無条件に人を信用して、「おまえが気に入った」と出会ったばかりの人に言うことができる人達の、素直さと懐の深さ。彼らがたどってきた過酷な歴史を想うとき、アイルランド人の心の力強さに触れたような気がした。

さて、こうした始まった私のわずか二泊三日のアイルランド滞在は、例のおじさんが薦めてくれたダブリンの南にある海岸沿いの街への列車の旅や、全くあてもなく途中下車した街でのケルト文化との出会い、ダブリンで見かけた生活と音楽、ダンスとの幸福な関係など、様々な違い探しにあふれていた。このことは、機会があればまた書いてみたい。

夏の時期に再びアイルランドに行こうとおもう。夜遅くまで



途中下車した駅

日が沈まない長く明るい夜を、彼らは音楽とビールとおしゃべりで陽気に過ごしているに違いない。きっとあのホテルのおじさんは、また暖かく私を迎えてくれることだろう。